

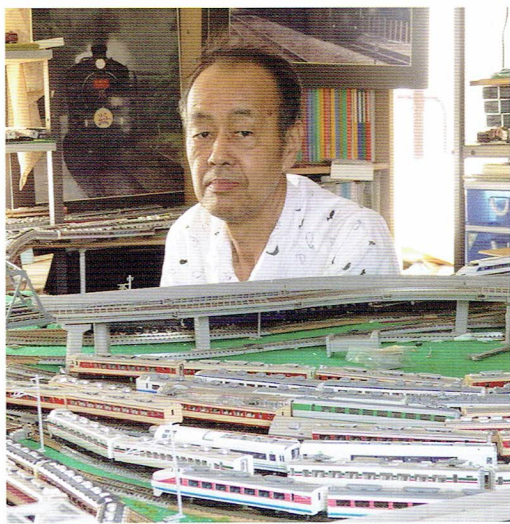
定年後の生きがいは 地域活動と鉄道模型収集

社協の会長はミニ車両運転会でも大忙し

シニアライフアドバイザー 松本すみこ

工場移転を機に 60歳定年を選択

釣田孝三さん（68歳）は大手電機メーカーに18歳で入社。まずはブラウン管製造から社会人人生が始まった。以来、工場が設備ごと中国に移管されたり、競合他社との合併に次ぐ合併など、時代とともに激動する日本の製造業の変遷を、身をもって味わってきた世代といえる。



800両ものNゲージを集めた釣田孝三さん

最後はカーナビの液晶事業に従事していた。その事業も、釣田さんがまもなく60歳の定年というころ、従業員を含めた工場を丸ごと金沢に移転させることが決定した。会社から「定年延長すれば金沢に行くことになるが、どうするか」と聞かれ、「それなら、定年を選びます」と答えた。

金沢に行けば単身生活が待っている。息子が千葉にいたので、一緒に暮らすのもいいかと思ったが、知り合いがいらない赴任先の人間関係が原因で、すぐに辞めてしまった人も知っていた。

では、辞めてどうするか。迷った末に、釣田さんが選んだのは地域活動だった。実は、定年前から町内の自治会でボランティアとして活動していた。始めて2年ほど経つと、地区の連合会長になり、それから、太子町の連合自治会長、西播磨の連合会長などを務め、2017年6月には請われて、太

兵庫県の南西部に位置する太子町たいしちやうにある釣田孝三さん宅のひと部屋。そこに通されて目を見張った。10畳ほどありそうな空間には、ところ狭しとミニチュアの鉄道模型と線路が並んでいた。通称、Nゲージと呼ばれるミニ車両は、釣田さんが20年ほどかけて集めたもの。地域活動に取り組みかたわら、自治会などの要請を受けて、子供たちのために運転会を開催し、人気のイベントとなっている。

子町社会福祉協議会（社協）の会長に就任した。

取材した8月は、「ちよつど就任の挨拶まわりをしているところで、ちよつと忙しい」時期。もちろん、会議や連絡も頻繁にある。

釣田さんは定年後の居場所や活躍の場をしっかりと確保したようだ。

しかし、釣田さんの活動で興味深いのは、自治会のような活動にどっぷり収まることなく、若いときからの趣味を活かしたボランティアも並行して行っていることにある。

もともとは“撮り鉄”

趣味は20代から始めた鉄道列車撮影だった。入社すると、同僚に“撮り鉄”が二人いたのだ。当時、車を持っていたのは釣田さんだけ。そこで、二人を乗せて、よく撮影に出かけた。

今ほど規制が厳しくなかったこともあり、1か所で撮ったら、す



集めたNゲージが並ぶ

ぐに追いかけて、次の撮影スポットに移動する。そんなことをしながら、重連運行のSLや各地の記念列車などの撮影を楽しんだ。「瞬間の美しさを収められるのが魅力でした」。

ところが、次第に、魅力的な列車が消えていった。お座敷列車などのジョイフルトレイン、ブルートレイン。「面白くなくなつて、写真を撮るのが減りました」。